

# ベトナムの教育事情

## —教育制度から日本語教育まで—

前ハノイ日本人学校 教頭

栃木県宇都宮市立清原北小学校 副校長 青 柳 文 男

キーワード：ベトナム、教育制度、教育の課題、日本語教育

### 1. はじめに

3年間ハノイ日本人学校に勤務させていただき、現地スタッフや現地校の子どもたち、その他現地に住む様々な人たちとじかに触れ合うことができた。その中で知ることのできたベトナムの教育事情の一端をご紹介します。

### 2. ベトナムの教育制度

日本の文部科学省にあたるのはベトナムでは教育訓練省である。「モエト (MOET =Ministry of Education and Training)」といい、日本人学校もこの役所に様々な書類を提出している。

国の教育政策はこの役所で管理されている。例えば7月に行われる大学入試は、大学、短大、国立、私立を問わずこの教育訓練省が作成した試験で選抜する。2次試験はない。1度の試験で第1志望から第3志望までの大学の判定を受けられる。

学年は9月に始まり、12月までが前期。1月から5月が後期。途中にテト (旧正月) 休みが入る。6月から8月が夏休みだが、多くの学校は8月半ばから補習が始まる。

6歳で就学して小学校5年、中学校4年。ここまでの義務教育だが、地方には小学校を卒業していない子どももいる。また、義務教育であっても教科書や制服等は有料であるので、これも貧困層の子どもが学校に通えない理由になっている。中学校のあとは高校 (3年間) や職業専門学校等があり、その後は大学 (4年間) などに進む。

ベトナムの教育制度 (広くは国の制度) は、古くは中国の影響を受けた。ハノイの文廟はベトナム最古の大学で孔子を祭る。役人登用試験の科挙も行われてきた。その後はフランス、旧ソ連、アメリカの影響を受けてきた。

ベトナムの識字率は9割を超え、東南アジアでは極めて高い。これはベトナム語表記の簡便さに由来する。ベトナム語は基本的にはアルファベット表記で特有の声調記号は付くものの、高等教育を受けなくても読むことはできる。かつては漢字表記であったが、フランス統治時代にアルファベット表記が導入された。

### 3. ベトナムの教育現場の様子

現地校 (小学校) を訪問してまず目を引いたのが「お昼寝部屋」である。簡易ベッドを並べたお昼寝部屋のある学校もあれば、机を並べてその上に寝かせる方式をとる学校もあった。

小中学校の時間割を見せてもらうと、どちらも月曜日の1校時は「全校集会」の時間である。全校生がひとところに集まり、国旗を掲揚して国歌を歌う。正面にはホーチミンさんの肖像画あるいは像が飾られている。

小学生も中学生もシャツに短パンのような簡易な制服の学校が多い。中学生では赤いスカーフを身に付けている学校も多い。この赤いスカーフは、ホーチミン少年先鋒隊やホーチミン共産青年団の印である。

ベトナムは数学教育に力を入れている。国際数学オリンピックで2002年に5位、2003年2004年に4位。ハノイで大会が開催された2007年には過去最高の3位であった。近年も2015年に5位になっている。手元の現地校小2の時間割には、算数の時間が毎日ある。

### 4. ベトナムの教育問題

ベトナムでは校舎が不足しており、午前午後の2部制をとる学校もある。公立校では、1学級の児童数が50を

超える学校もある。私が訪問したいいくつかの学校は比較的裕福な子が通う私立校だったが、プールはなかった。広いグラウンドもなく、運動場は中庭のような感じだった。体育館のない公立校もあるという。

山間部では教育事情はさらに悪く、学校までの距離が徒歩で2、3時間というところも珍しくない。また、こうした地域は少数民族の村が多く、言語教育も大きな課題である。

ベトナムは急速な経済発展、近代化とともに学歴社会が進み、それに呼応して学習内容は増加し、授業は教師が説明して子どもはひたすら黒板を写す詰め込み教育が一般的となった。学習内容を消化しきれない子どもは補習が必要となり、あわせてストレスもため込んでいるという。詰め込み教育への反省から、幼稚園での読み書き教育を禁じる指示が出たこともあった。私は、訪問した現地校の子どもたちの眼鏡の使用率が高いことと肥満傾向の子が多いことが気になった。視力の低下や肥満は詰め込み教育によるストレスの蓄積ばかりが原因とは思えないが、多少の因果関係はあるのではないだろうか。

一方、教師の側から問題点を探ると、ベトナムの教師の給与が低いことが挙げられる。このことは教育の現場に優れた人材が集まらないことと現場の教師の授業改善の意欲につながらないことを意味する。生活のためと学歴偏重社会の要求から、放課後に自宅や塾で補習を行う教師も多い。このことが本来の学校での授業内容の向上に専心することの妨げとなっているとの懸念もある。

本校のベトナム人スタッフに教育の問題点を聞くと、学習他の習い事の過熱化による教育費の高騰、大卒者の増加による就職難、「学力を上げたかったら私の塾に来なさい」という教師がいることなどを挙げた。

## 5. ベトナムと日本の関係

江戸時代初め、日本はベトナムと交易がさかんで、ベトナム中部のホイアンには千人を超える日本人が居住し、日本町が形成された。日本人によって作られたというホイアンの「遠来橋」は「日本橋」と呼ばれ、ベトナムと日本の交流の面影を今日に残している。本校では中学部2年生が修学旅行で訪れる。日本が鎖国に入ったため、交易はその後とだえる。

太平洋戦争中は、東南アジアの連合軍を攻撃するため、日本軍がベトナムに進駐した。戦後の2国間は順調に友好関係を築き、現在日本はベトナムにとっての最大の経済支援国である。

ハノイの玄関口であるノイバイ空港の国際線ターミナル、空港からハノイ市内への道路、その途中の紅河にかかるニャットン橋など、いずれもここ2年ほどの間に日本の支援で完成したものである。ニャットン橋は通称「日越友好橋」と呼ばれている。2014年12月、本校と現地校の中学生がこの橋の開通前にこの場で交流するというイベントがあった。

日越両国間は一時不幸な時代はあったものの、古くから交流があり、特に近年は緊密の度合いを増している。

これは一緒に働くベトナム人スタッフと会話しても感じることであるが、ベトナムの人々は日本や日本人を大変好意的に受け入れてくれている。日本の製品は品質がよい、日本人は頭がいい、日本人は礼儀正しい、(日本に行ったことのある人は)日本はきれいな国である、日本は安全な国であるなど、大変に賛辞を送ってくださる。

良好な日越関係は在留邦人、日本商工会への加盟企業数の増加として現れている。外務省の統計によると2015年10月現在のベトナム在留邦人数は14,695人(前年比8.5%増)で、国別では17位である。東南アジアでは、タイ、シンガポール、フィリピン、インドネシアに次ぐ。

ベトナムからの留学生は、現在は日本への留学が1番多く2009年は3千人(前年比11.3%増)を超え、2014年には1万8千人と急増している。

2015年、近く日本へ留学する看護師を目指す若者たちと本校6年生との交流会が実現した。本校6年生は、ベトナムの人たちの生活習慣などに関する日頃の疑問について、直接ベトナムの人に日本語で聞いたのが有意義であった。何より、ベトナムの人と1時間以上も話をする機会が持てたことが貴重であった。



ホリアンの「日本橋」



日本の協力のできた「日越友好橋」

## 6. ベトナムにおける日本語教育

1943年にサイゴン（現ホーチミンシティ）で日本語教育が始まったとの記録がある。

現在は良好な日越関係を反映して、日本語学習者も増加の一途をたどり、2009年12月の日本語能力試験受験者は1万5千人を超えた（前年比12%増）。街の本屋さんの店頭には日本語学習テキストが山積みになっている。レベルごとの教則本のほか、漢字を覚えるための本やカードもある。漢字の成り立ちの本質を説明しているものがほとんどだが、やや強引なこじつけで学習者の記憶に残そうと苦心しているものもある。

国際交流基金によれば、日本語学習人口は4万7千人で世界8位（2012年）、2003年の2.5倍と急増している。学習のきっかけはマンガやアニメなどが多いようだが、日系企業への就職、転職を目指して働きながら日本語学校に通う例も少なくない。近くの日本語学校を訪ねてみると、期間半年、月謝約1万円のコースが人気だという。

現在ベトナムではあらゆるレベルで日本語学習の場が整えられつつある。2003年から一部の中学校で日本語教育が導入されてきたが、2016年には東南アジアで初めてハノイの小学校3校で日本語が第一外国語として教えられる。

## 7. ベトナムでの日本文学の普及

少し大きめの書店に行くと、「ドラえもん」などのベトナム語版が安価で並んでいる。ドラえもんの人気、知名度は別格で、2016年、ベトナムで初めて国を挙げて交通安全標語の募集が行われたが、そのポスターにドラえもんが起用された。

他に日本のマンガでは、「クレヨンしんちゃん」「ワンピース」「名探偵コナン」などが売られている。日本文学では、村上春樹「1Q84」、吉本ばなな「キッチン」、川端康成「雪国」、太宰治「女生徒」などを見かけた。「舟を編む」「1リットルの涙」など、近年日本で話題になった映画やドラマの本もいくつか並んでいた。スーパーでは、日本昔話の絵本が売られていた。「かぐやひめ」「かさじぞう」「おむすびころりん」「きんたろう」などがあった。「かぐやひめ」をベトナム語講師に訳してもらったところ、5人の貴公子が宝物を探す場面など、かなり日本の話に忠実にベトナム語訳されていた。

## 8. おわりに

初めてハノイのノイバイ空港の建物を出了瞬間の蒸し暑い空気、その後1か月以上も太陽を見ない天気、バイクの多さは衝撃的であった。しかし、無秩序に見えた交通事情も慣れるにつれ、運転手同士の阿吽の呼吸で主張と譲り合いがあることが分かってきた。雨に降り方や風の吹き方にも法則性があることも分かってきた。

ベトナムの人たちは店先や木の下などどこでも小さなすに座って楽しげにお茶を飲み、話している。歩道や公園のわずかなスペースでも体操をしたり、バドミントンをしたりしている。お店の店員さんは圧倒的に若者が多く、活気を感じる。あらゆる物をバイクで運び、どんな渋滞でも流れに従ってバイクを進めるたくましい姿を

毎日見るうちに、どんどんベトナムの人への親近感が増してきた。

一緒に働くベトナム人スタッフの真摯な仕事ぶりや、ベトナムの人は日本が大好きだというたくさんの情報に触れ、この地で仕事ができる幸せを改めて感じた。

ハノイ日本人学校では、ベトナム現地校との交流のほか、ベトナムの習慣を紹介する行事、ベトナムの素材を取り入れた授業の工夫などに取り組んできた。帰国後は、日本で学ぶ子どもたちに、ベトナムという国のことのほか、ベトナムの人たちがどれほど日本のことを好きでいてくれるのかを伝えていきたいと思う。それが微力ながら、日本とベトナムの友好関係を更に深めることにつながると信じている。